

滝千春『Schnittke Clowns』に聴く、 描ききられたシニートケ

〜安田美充央さん（作曲家・ピアニスト）を迎えて

ふたたびの交差である。本誌2025年3月号で対談企画を行なった、作曲家・ピアニストの安田美充央さんとヴァイオリニストの滝千春さん。

その際は安田さんのアルバム作品『SORA』を

メインテーマに對話した二人が、今回は立場を半回転。

滝さんが10月にリリースした新譜

『Schnittke Clowns』を

CDプレーヤーのトレイに載せ、

安田さんをゲストに迎えて

”シニートケ談義”に花を咲かせる。

スピーカーの前に立ち現れた

シニートケの神秘を目の当たりにしながら。

安田：前にここで一緒にした時から1

年くらい経ちますか？ 僕の『SORA』

という作品を聴きながらお話をして。

滝：はい。その頃は私が『Schnittke

Clowns』の準備期間に入っていて、

その1カ月後くらいにレコーディング

でした。

安田：そうか、言っていましたね。「ま

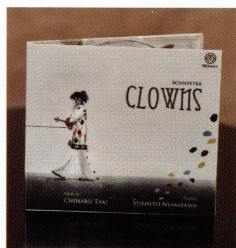
だ話せないけど自分がやりたいプロジ

ェクトに向けて準備中」とか。それに

しても前作がプロコフィエフのアルバ



編集部（構成）
写真・高橋慎一



「Schnittke Clowns」

〈演奏〉

滝千春（ヴァイオリン）

沼沢淑音（ピアノ）

[SACD Hybrid] M Classics
MYCL-00066 ¥3,740

1-4 「ヴァイオリン・ソナタ第1番」

1. I. Andante／2. II. Allegretto

／3. III. Largo／4. IV. Allegretto

5. 「ヴァイオリン・ソナタ第2番

「ソナタ風」

6. 祝賀 Rond

7. きよしこの夜

8. ボルカ

9. タンゴ（映画「Agony」より）

10-11 「道化師と子供たち」組

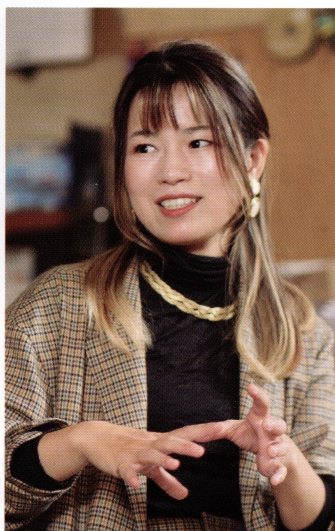
曲（ヴァイオリンとピアノ編）

10. I. タイトルミュージック／11.

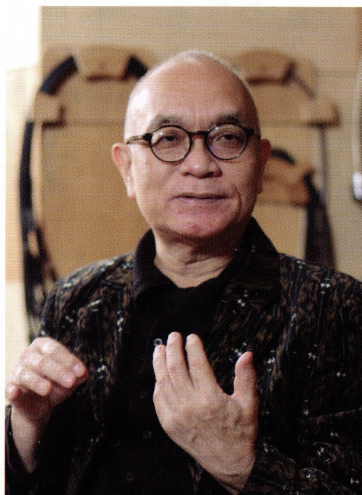
II. インテルメッツォ／12. III. アク

ロバット／13. IV. 病院にて／14.

V. フルツ



日本の他、ドイツ、フランス等ヨーロッパでソリスト、コンサートミストレス、室内楽奏者として、精力的な活動が続けるヴァイオリニストの滝千春さん。23年リリースの前作『Prokofiev Story』は「レコード芸術」誌の特選盤に選出され、ONTOMO MOOKレコード・アカデミー賞も受賞するなど各方面で高評価を獲得。今回は2025年10月31日にリリースされた作品『Schnittke Clowns』を引っ提げ、25年3月号に続く2度目の登場となる



ドイツの名門レーベル「WINTER & WINTER」では20枚以上のリーダーアルバム&共演作品をリリース。クラシック、ジャズを超越するそのスタイルが、「現代でもっとも個性的」（独「Kieler Nachrichten」紙）と評される、作曲家・ピアニストの安田美充央さん。25年3月号では、自身主宰のレーベル「Pourquoi Label（ブルクワレーベル）」より安田さんがリリースした『SORA』をメインテーマに滝さんと対談。今回はゲストの立場で滝さんと向かい合う

ム（『Prokofiev Story』）で、今度はシュニトケ。この流れはすごく独特だな。アルフレート・シュニトケは、プロコフィエフやショスタコーヴィチの後を継いだ、ソ連とその崩壊の狭間にずっといるような、激動の時代を生きた作曲家です。なぜシュニトケをテーマに作品をつくらうと考えたんですか？

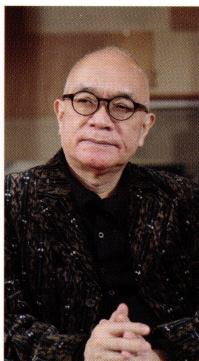
滝：私は近代ロシアの作曲家がすごく好きで。まさに激動の時代を乗り越えてきた——苦しみ、つらさ、葛藤が渦巻くなか、自分がどう音楽として生き残るかみたいな思いが、血が滲むように感じられる人たちが好きなんです。よ。「ヴァイオリンソナタ第1番」は高校生の頃から知っていて演奏したこともありましたけど、当時深いことは特に感じていませんでした。それからシュニトケについての本を読んだりもして、改めてヴァイオリン・ソナタを弾いた時に、健康者じゃない音楽というか、常に弱者の存在を意識している、苦しい時代に必死に生きようとした人たちの味方をしてる人なんだというのが、じわじわと伝わって



「シュニトケは“スパイス”がすごくキーになります」

安田：なるほど。例を挙げると今回のアルバムには「きよしこの夜」なんて曲が入ってますけど、ヴァイオリンのソロが始まり何の汚れもない温かい音で弾いていった先で、まったく合わない不協和とも言える音をゴーンとぶつけてくる。

る感じがあつて。だからこそねじれてくる音楽というのが響いて、ハマっちゃったんですね。



今回も舞台は本誌試聴室。“全身全霊のシュニトケ”をリファレンスシステムで再生しつつ、対話を交わす

そういつたところが音楽の響きのにごく惹かれるということでしょうか？

滝：響きのというより、彼のアイロニー的表現に惹かれます。「きよしこの夜」については、タイトルにもある「クラウン」——つまりピエロ的な要



美しい部分とそうじゃない部分、
シュニトケは両方対等にフォーカスしてる人だと思います。(滝さん)

ヒロシアでもチャイコフスキーを弾く時とシュニトケを弾く時で、譜面で同じように「ビブラート」と書いてあつたら、シュニトケの場合は胡椒を振りかける感じで演奏するんですか？

滝…胡椒じゃとどまらないですよ(笑)。

音程が変わってるんじゃないの？くらのビブラートをかけることもあります。「美しいだけが芸術じゃないよね」って。人として生きている限り、美しい部分もあればそうじゃない部分もなきやいけない。シュニトケは両方にちゃんと対等にフォーカスしてる人だと思ふので。

安田…とはいえ美しくないビブラートって相当高度ですよ。

滝…いえ、高度ではないですけど、楽器ひとつでどこまで表現してやろうかというのは結構勝負どころです。シュニトケの音楽ってすごくうねってるんですよ。「奥の何か」まで理解しないと曲として完成

しない。それで

いろいろな録音も聴いてすご

キツチュで刺激的。
まさに「聖」と「俗」のクラッシューですね。(安田さん)

安田…素朴に聴いた感想として、演奏的に滝さんはもちろん沼沢さんのピアノも素晴らしいです。録音もまた作品に似合った音でびったりきてて。



「唯一無二の表現。
その面白さに
氣ついてほしい」

安田…それではここで実際に何曲か聴いてみましょうか。滝さん、どの曲にしますか？

滝…そうですね…、お話に出た「ポルカ」と「タンゴ」をお願いします。

(試聴)

安田…これ、普通のポルカがちゃんと面白く弾ける人が弾かないと駄目ですね。エンターテインメントとしてグレードが高い。

滝…このテンポ感はクレレーメルを参考



にしました。この曲を彼がいろんな楽器の編成で演奏しているライヴがあつて、それがものすごくゆつくりなところから始まるんです。それが面白かつたので。「タンゴ」では沼沢君のピアノがすごくよくて聴き惚れちゃってるんです、私。

安田…コケティッシュに弾いてますよ。

滝…私もあえて音を綺麗に弾かずに、ちよつと枯らしてポンティチェロ寄りにして。そうしたいと思わせてくれるピアノリストなので。彼にはこういう音楽が合つてると思うし、彼自身も好きなんだと思います。作曲家が持つ独特な闇の部分に思いを馳せるタイプなので、音楽上でもちゃんと共鳴し合えますね。また彼はロシアに留学していた過去があつて、空気感からわかつてもらえるところもありました。

次にもう1曲いいですか? 「道化師と子供たち」から「タイトル・ミュージック」を。

(試聴)

安田…うーん…、まさに「聖」と「俗」のクラッシューですね。非常にキツチュで刺激的ですし。

滝…まさに、ですよ(笑)。シュニトケという人物を象徴している感じがする。この作品に出会えて本当に良かった。

安田…もう、完成度がめっちゃ高いです。そもそも僕は、シュニトケを一枚の作品で取り上げたこと自体に価値があると思ってるんですよ。

滝…だからあんまり万人受けしないんです。私のやつてることつて(笑)。

安田…いやいや、そこが滝さんの魅力でもあるんです。たとえばアストル・ピアソラの音楽なんて、僕が20代の頃



は前衛的で難解なタンゴという評価で見向きもされなかった。それが今や定番になっていて、しかもそうなった発端はクレイメルだったりする。演奏家はそういう可能性を切り拓くことができるわけですから。

滝…それは演奏家の使命だと私も思います。日本で物足りなく感じるのはそのなんですよ。ヴァイオリニストは

みんな「愛のあいさつ」弾いてりやいんだみたいな風潮が私は好きではなくて(笑)。だってそんなのはクラシック音楽の一部の一部じゃないですか。もつといるんなところにいる作品が眠っているのに誰も取り上げようとしなない。

安田…取り上げることがリスクだ、みたいな風潮ですよ。

滝…芸術を扱う人が、売れないからつてそこを閉ざすのは結構な冒険ですよ。シュニトケはそれほどポピュラーじゃないかもしれませんが、こういう唯一無二の表現で音楽を書いている人を見なさんにも知ってほしい、その面白さに気づいても

らいたい、そういう気持ちです。それに

安田さんもシュニトケお好きですよ?

シュニトケと向き合つてきて安田さんの作品とシュニトケはちよつと近いなと思

つていて。

安田…好きですよ、似てる部分もあるかもしれません。

滝…だから、これから安田さんと一緒につくるアルバムでは、安田さんの新しい地平を切り拓かなきゃいけない使命を、演奏家の私が担っていることになるんです。

安田…それはありがたい。でも、切り拓いてみたけどそこには何もなかったということになると、作曲家としては目も当てられないな(笑)。

滝…いやいやそんなことありませんよ。いただいたスコアからはその可能性がひしひしと感じられますので、気合いを入れて頑張りたいと思っています。

滝千春 公演情報

扶間美帆 & 滝千春 project 「MaNGROVE」 Japan Tour 2026

出演: 扶間美帆(プロデュース、作・編曲、ピアノ) / 滝千春(ヴァイオリン、プロデュース) / 山根一仁(ヴァイオリン) / ルオシャ・ファン(ヴィオラ) / 佐藤晴真(チェロ) / 木村将之(コントラバス&エレクトリックベース)

1月17日(土)【東京】小金井 宮地楽器ホール
1月20日(火)【大阪】あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール
1月22日(木)【京都】京都コンサートホール アンサンブルホールムラタ
1月24日(土)【長野】ハッポウ高原音楽堂
1月25日(日)【東京】BLUE NOTE TOKYO

「代官山 BLOOM Festival」

～あなたの“インサイド・アーティスト”を呼び覚ます3日間
アーティストックディレクター・ヴァイオリン: 滝千春
2026年3月27日(金)@東京・代官山 蔦屋書店 Anjin
講演内容: 「花と音」 「JAZZ in the Night」他
3月28日(土)@東京・代官山 ヒルサイドプラザ
講演内容: 「ベイビー・ブルーム」 「スーホの白い馬」他
3月29日(日)@東京・代官山 東京音大 TCMホール
講演内容: 「LA SEÑAS!!」 「JUST MESSIAEN」他

「滝千春 ヴァイオリンリサイタル」

ピアノ: 沼沢敬音
2026年6月5日(金)【東京】王子ホール
※詳細は近日発表予定
主催: 藍インターナショナル(☎ info@ai-international.co.jp)

